

基礎学力を定着させる教育環境および学習指導のあり方 ーアメリカ（ノースカロライナ州）の小学校の場合ー

東広島市立平岩小学校 教諭 田 中 宏 憲

(1) はじめに

今年度から学校週5日制がスタートした。それに伴い、学力低下を危惧する声がマスコミを通して聞こえるようになってきた。本校においても、保護者から同じような声が聞かれるようになってきた。そこで私は、基礎学力の定着に的をしぼって個別研究をすすめ、その成果を生かすことによって信頼される学校づくりをしていきたいと考えた。

今回訪問するノースカロライナ州には、「The ABC plus」という教育改革プランがあり、研究テーマに関して得るものが大きいと期待している。

(2) 研究の概要

①研究内容

研究テーマに迫る視点として、次の3つをあげることにした。

- 教育の方向性（The ABC plus）について
- 教育環境（人的環境・物的環境）について
- 指導方法について

②研究方法

授業参観、インタビュー、資料収集などを通して検証する。

③現地調査の日程

| 日 時 | 場 所 | 内 容 | 関係者・関係機関 |
|----------|--|---|--|
| 8月19日（月） | Wahl Coats Elementary School Elmhurst Elementary School South Central High School | 学校訪問 | |
| 8月20日（火） | Elmhurst Elementary School | 授業参観 ・ Reading ・ Centers/Stations ・ TAG lesson ・ Writing 資料収集 | Mrs. Morton Mrs. Bullock Mrs. Hachmeister Mrs. White |
| 8月21日（水） | Elmhurst Elementary School | インタビュー ・ PTA活動について 授業参観 ・ TAG lesson インタビュー ・ TAGについて 資料収集 | Mr. Zary Mrs. Hachmeister Mrs. Hachmeister |
| 8月22日（木） | Elmhurst Elementary School | インタビュー ・ ABCについて 授業参観 ・ Math インタビュー ・ ESLについて 授業参観 ・ TAG lesson インタビュー ・ カウンセリングについて 資料収集 | Mrs. Bailey Mrs. Harris Mrs. Catherine Mrs. Hachmeister Mrs. Hollingsworth |
| 8月23日（金） | North West Elementary School | 学校訪問 | |

(3) 研究の結果と考察

①The ABC plus について

日本では、「学力とは」という質問に対して、様々な答えが返ってくるように思われる。さらに、「基礎学力とは」と尋ねた場合はどうであろうか。その点、アメリカ（ノースカロライナ州）では、答えが明確である。いわゆる読・書・算（Reading、Writing、Math）である。このことは、ノースカロライナ州が作成した「The ABC plus」にはっきりと書かれている。それを受けて、毎年5月には州統一学力テストが実施されている。

ABCとは、Accountability（説明の義務）Basic（基礎学力の充実）local Control（保護者や地域住民の参画）の3つを指している。私は、この中でもAが基礎学力の定着に向けて大きな役割を果たしているように思う。

ここでいうAccountabilityは、ただ単に保護者に対して口頭で成果と課題を説明するというものではない。州統一テストの結果がインターネット上で公開され、それに基づき学校が評価される（5段階評価で評価基準も明確である）というものである。実際に、私が訪問したエルムハースト小学校でも North Carolina School of Distinction 1999-2000という大きな看板を誇らしげに掲げていた。また、エルムハースト小学校のベイリー校長は、保護者に対して、年度当初に数値目標を示し、目標を達成できなかった場合はその理由を分析して説明するそうである。

このシステムを日本で導入するとどうなるであろうか。おそらく教師の間では、「反対」の大合唱であろう。しかし、子どもたちの学力を保障するということに危機感を持っていなければ、向上的変容は認められないと思われる。昨今、広島県福山市が同じような取り組みを始めた。ノースカロライナ州のABCは、これからの日本の教育シーンを見ているようであった。

②教育環境について

○人的環境について

ノースカロライナ州の小学校は、教師の役割分担を明確にすると共に、その専門性を生かし連携することによって、教育効果をあげようとしている。

- principal—学校教育目標を具体化し、職員の目指すべき方向を明らかにしている。中でも、Reading、Writing、Mathについては、The ABC plus に基

づいて目標を数値化し、児童の変容（学校教育の成果と課題）をグラフなどを使って的確に把握しようとしている。平岩小学校においても、学校教育目標は明文化されているが、目標に数値を入れるケースはなかった。

- class teacher—同じgradeを数年にわたって担当することにより、その grade における teaching methodを磨いている。このことによって、各gradeのスペシャリストを養成することができる。私は、10年間ですべての学年を担当したいと考えている教師である。言い換えれば、ジェネラリスト志向である。
- assistant teacher—3rd gradeまで各学級に1名配置されている。学習に躓いている子どもに対してマンツーマンで対応している。個を大切にしていることがここからも伺える。また、学級事務（テストの採点やノートチェックなど）を担当することによって、class teacherが教材研究に集中できる環境を整えている。本校でも、今年度から「はばたきプラン」と称して、1年生のみ2人体制で指導にあたっている。その成果が注目される。
- counselor—月ごとにテーマを決め、character of education（日本における道徳）を各学級で実施している。また、プライベートな問題について、子供たちの相談相手となっている。ここでも、class teacher が教材研究に集中できる環境を整えている。本校では、原則として担任が counselor の役目を果たしている。
- media teacher—図書やパソコン、VTRなどが一堂に会したメディアセンター（日本の図書室とパソコンルームが1つになったようなもの）で指導にあたっている。少なくとも本校には、このような立場の人は存在しない。
- English Second Language teacher—英語圏以外の地域から転入してきた児童に対して、英語能力を保障するために、週に1日学校外のセンターで指導にあたっている。エルムハースト小学校では、金曜日の全時間をセンターにおける学習にあてていた。本校には、日本語指導学級が存在する。教務主任が時間割を作成し、日本語指導学級担当者（1名）がその指導にあたっている。
- Talent Academic Gifted teacher—アチーブメン

トの高い子どもたちをさらに伸ばそうと、思考力の育成を中心に取り組んでいる。また、カリキュラムやシンキングスキルの開発に努めたり、他の教師に対して授業のアイデアを提供したりするなど、学校のリーダー的な役割を果たしている。教務主任と研究主任を合わせたような立場である。日本では、Talent Academic Giftedという考え方が広がりやすく、本校においてもそのようなクラスは存在していない。

このように、ノースカロライナ州の小学校には様々なポストがある。また、児童数に対する職員の数も多い。

○物的環境

＜各gradeでは＞

- ・プレスクールやK grade—すでにThe ABC plusを睨んだものになっている。その最たるものは、至る所にアルファベットや数字が配置されているという点である。教室の壁面はもちろんのこと、机の上や床、中庭にまであった。床の上に置かれている絨毯や中庭に置かれているブロックなどは、体を動かしながら学習できるものになっている。これらは、机にすわって学習するには限界があるという配慮から、設置されたものと考えられる。1st gradeにあがるまでに、アルファベットと数字を徹底的に身につけさせようという意図が、教室及びその周辺からうかがえる。日本の幼児教育について十分に調査していないので、両国の比較は現時点ではできない。
- ・1st gradeや2nd grade—掲示物は、K gradeとよく似ている。基礎学力を支える要素については、スパイラル的に学習できるように配慮されている。繰り返すことによって初めて定着させることができるという意味を掲示物から受け取ることができる。
- ・3rd grade以上—アルファベットの（大文字と小文字）の一覧表が、ここにも置かれていた。日本の場合、ひらがなやカタカナの一覧表を2年生以上の教室でみかけることは、ほとんどない。

＜学校全体では＞

- ・掲示物など—各教室の掲示物やプリントは市販されているものが多く、自作のものはあまり見当たらなかった。このことによって、教師が教材研究

（授業構成）に十分時間を費やせるようになる。また、見た目にも分かりやすく児童の理解を促すことにつながるとおもわれる。

また、シンキング・マップというものが各教室に掲示されており、考えを進めていく上でのヒントとなっている。

- ・パソコン—エルムハースト小学校では、各教室にパソコンが1台置かれていた。これは、調べ学習の際に用いるというよりも、Reading やWritingのテストを行うためのものである。これとは別に、メディアセンターにパソコンが置かれているという状況である。

ノースウエスト小学校では、メディアセンターの他にパソコンルームがあり、そこに30台のパソコンが置かれている。もちろん各教室にも置かれている。

③指導方法について

○Reading—低学年では、読み聞かせに始まり、一斉読み、個人読みと移行していた。このパターンは、私自身の実践とそんなに変わるものではない。ただし、読みにあわせて動作化させる場面はたいへん参考になった。

中学年では、はじめに時制についての発問をテンポよく行っていた。その後、新出単語の発音と意味の指導に入った。ここで、興味深いシーンに出くわした。日本では、言葉の意味を学習する際に、とりあえず辞書（国語辞典）をひかせる。しかし、私が参観した授業では、「次の意味の言葉はどれ」と投げかけ、教師自身が意味を言い、子どもたちが該当する言葉を選ぶという方法をとっていた。

また、音読及び読解の場面では、規則性のようなものを見出すことができた。まず、教師が音読し、子どもが一人ずつ音読する。そして、教師が内容を確認する発問をしたり語句の意味を尋ねたりする。これを2、3分のサイクルで繰り返している。音読に集中していない児童や音読できない児童に対しては、テキストを指やものさしで押さえていた。

最後に、時系列にそって内容をノートにまとめていた。この時は、ペア学習という形態をとっていた。このペア学習は、人間関係を作ったりお互いの考えを深めたりするために行われている。

授業全体を通して言えることは、音読そのものよ

りも読解にかなり時間をかけているということである。

Readingのテストは、マンツーマンで1つ1つの単語が読めているかチェックしたりパソコンを使って1人1人の現在の読解力をはかったりする（この結果によって教師が児童に適切な図書を薦める）など厳密に行われている。

これらのことから、「The ABC plus」で求められている3つの力の中でも、特にReadingが重視されていることが分かる。

○Writing – まず、本時の学習（指定されたアルファベットを含んだ作文）について、教師が例示する。子どもたちはスペリングディクショナリーというものを持っており、単語のスペルがはっきりしない場合はそれを見て作文している。文章の正確さは、その文章を全員の前で発表し、相手に伝わるかどうかで判断される。

教師は、学習の時間差を埋めるために、内容を表す絵を描かせたり読書をさせたりしていた。しかし、Writingの力をつけるという目的で授業を行うのなら、第2、第3の課題を用意するべきであると考ええる。

○Math – Writingと同じように、まず、本時の学習（数の大小）について、教師が例示する。その後は、練習問題が何問も繰り返される。答えを言わせる場面でも、スモールステップをふませている（どちらが大きいかをたずねる・不等号の向きをたずねる・言い方をたずねる）。

練習問題が1通り終わると、ややレベルの高い練習問題に取り組む。ここでは、既習事項を復習できるように、問題そのものが工夫されている。

最後は、ゲーム（ここでは、ダイスを使ったゲーム）を通して学習内容の定着を図っていた。

アメリカ（ノースカロライナ州）のMathの授業は、各段階で必ず教師が例示し、その後児童が練習問題に取り組むというパターンであり、いわゆる問題解決型ではない。基礎学力の定着という観点から

すると、アメリカ型の方が効果が大きいと考える。

(4) 今後の展望

現地調査は、1週間という短い時間ではあったが、たいへん有意義なものであった。中でも、いろいろな立場の方（校長、TAG、カウンセラー、ESL、PTA会長など）から話が聞けたことは、学校という組織が基礎学力の定着に向けてどのような動きをしているのかをはっきりさせてくれた。

その反面、授業を45分間通して参観する機会が少なく、Reading、Writing、Mathの指導において工夫されている点を十分に見出すことができなかった。また、自分自身が訪問先の学校で授業をすることもなかった。今後、お互いの授業を参観し合うということはたいへん難しいであろうが、E-mailなどを通して指導法について意見交換することはできるであろう。その際は、より具体的な場面において論じることが、お互いの力量を高めることにつながると思う。

幸い、コンタクトパーソンを通じて、マニュアルやワークシートなどをいただくことができた。これらを活用しその学習効果を伝えることが、第一歩になればと考えている。

今回はアンケートの実施などを見送ったので、研究テーマについて量的分析を行うことができなかった。機会があれば、ぜひとも取り組みたい。

(5) おわりに

今回の訪問を通して感じたことは、今日本が実施しようとしているいくつかの試みはアメリカから輸入されたものではないかということである。基礎学力の定着に向けて、評価規準を具体的に作成したり、結果をインターネット上で公開したりすることなどから、そのことがうかがえる。お互いのよさを取り入れることによって、指導者の意欲の向上を図り、子どもたちに確かな学力をつけていきたいものである。

信貴山の虎 アメリカへ行く —47歳の旅立ち・私自身の総合学習として—

三郷町立三郷北小学校 教諭 太田 啓子

1. 今年もアメリカの先生たちくる？

5月の終わり頃、おもに4年生以上の子供たちから時折この質問を耳にするようになった。思えば、3年間にわたって毎年6月になると数人のアメリカ人教師が来校され、集会委員会によるウェルカム集会に始まり、各学年やクラスの授業見学の数日間滞在されることが当たり前ようになっていた。

2. 本校とWahl-Coates との3年間を振り返って

初年度は、現場の教師側からすると「降ってわいたような話」に、とまどいがなかったわけではない。「おもしろそうやん、やろやろ。」から「なんで？ それに何をしたらいいのん？」まで反応は様々であったと記憶している。校長先生が「普段通りの様子を見せてあげたらよいのです。」と、言われたものの「せっかく遠いところから来てくれはんに、やっぱり歓迎してあげたいよなあ。」「国際交流の場にしたいなあ。」「日本の紹介もしたいしなあ。」等々、結局4日間の予定をきっちり組みすぎてその通りにはいかなかったり、子供たちから「隣のクラスには来てくれはったのにうちのクラスには来てくれはれへんの？」等のリクエストもあったりして急速、給食に招待するクラスや掃除を見てもらおうかなどまで今から思えば、さぞお疲れになったことと思う。

さて当時、私は1年生の担任だった。そして、私的なことになるが私自身が友人の勧めで英会話を初めて、異文化交流の面白さを知りかけてまもなくの頃だったので、これは是非とも子供たちにもその楽しさを味わわせたいと考えた。

My name is・・・と、自己紹介の方法を教えるとき意欲満々の子供や、普段教室でも滅多に話をしないのに突然英語だと遊び半分で言えるようになった子供もいた。中でも照れ屋のしょうちゃんは、どうしても「マヨネーズしょうた」としか言えなかったのだが彼のお母さんが「それでもいいから言ってみたら？ きっとわかってもらえるよ。」と、励ましてくださっ

た。(彼のお母さんからの手紙で知った。)

いよいよ当日、Corbin 先生が教室に来られ、子供たちが歌を歌って出迎えた。Corbin 先生ご自身が1年生の担任でもあり、とてもにこやかな笑顔をお子たちに向けてくださったので和やかな雰囲気の中、ついに一人ずつ挨拶する時が来た。

しょうちゃんも「マヨネーズ しょうた」と元気よく言った。Corbin 先生は、一人ずつと握手をしてくださっていたがしょうちゃんにも笑顔でうなずきながらだったので家に帰って「お母さん、ぼくの英語わかってもらえたで。」と、うれしそうに報告したということだった。

- ・アメリカのせんせいがくらすにくてくれてうれしかった。
- ・えいごであいさつするのがときどきした。
- ・もっとえいごでおはなししたかった。
- ・かみのけもきんいろだけど、まつげもきんいろできれいだった。
- ・あめりかのひとは、(きゅうしょくの)はいぜんだいにすわるの？

等の感想が1年生らしかった。

その後もCorbin 先生との交流は続き、先生が1年生の子供たちと「アメリカと日本のちがい」という絵本を作られたときに、私のクラスも写真で載せていただいた。しかし、Corbin 先生は1年生の専門であり、私は2年生に持ち上がったこともあり子供の作品等を送ったこともあったがやがて交流は途絶えてしまった。

2年目になると、受け入れに際してもそれほど緊張しなくなり、また、適度に融通を利かせながら日程を組むことにもなれてきた。どのクラスも歓迎の気持ちは表しながらその時期の授業を通じて日本のことを紹介するゆとりが出てきた。例えば、6年生の国語で狂言の単元を学習したり、日本の歴史の授業の中で茶道をお子たちと共に体験してもらう等、また、低学年の生活科で「むかしのあそび」をお子たち同士が紹介しあう中に一緒に参加してもらう等である。

また、その年のサマリーミーティングは、大阪教育

大学で行われ、本校から近いので数人で参加しようということになった。サマリー後のパーティは和気あいあいとしていて外国の方たちと同席するパーティが初めての私だったが、いつの間にか日米の教育についての話の中に引き込まれていた。そして、お開きの時、本校へ数日間来てくださったWahl-Coates E. S. 副校長 Harvey 先生に「あなたにアメリカの挨拶でお別れをしていいですか？」と尋ねられた。Yesとうなずいたとたん私は抱きしめられていた。さすがに驚いたが、気持ちがよくわかる気がして急に親近感を持ったことを思い出す。

3年目は、来校者が一番多かった。子供たちも私たちも歓迎の気持ちが強く、どんなことをして迎えようかと楽しみになってきた。最初の日、玄関に来られたとたん大きな歓声が沸き起こり、？と思っているうちに握手せめにあった。なんと1年目に来られた先生たちと再会できたことと、交流のあったCorbin先生がその中におられたのである。しかも、私のことをよく覚えていてくださったのである。これには感激した。

この年、私は4年生の担任だったのだが、1年目から水着があったら学校のプールで泳ぎたいという希望を持っておられたCorbin先生が、3・4年生の水泳の時間に参加して下さることになったのである。子供たちは大喜びである。競泳もされ、その賞品にはプールのフェンスを利用して4年生が栽培しているきゅうりを子供たちがプレゼントに持っていくという場面もあった。

また、「総合的な学習の時間」の紹介に4年生は「水」をテーマにしていたのだが校区を流れている小川や池、大和川等の水を集めてきて水質検査をするところを見ていただくことにした。授業後も質問が相次ぐ等、環境教育はアメリカでも関心が高いようであった。

最終日には、「是非、来年はあなたが私たちの学校に来てください。」と、言っていた。

本校からも、すでに2名の先生がWahl-Coatesを訪問され、毎年、全校集会でアメリカのお話を聞く時間を持ってきた。

職員研修でもWahl-Coates小学校のことを中心にアメリカレポートを紹介していただいていた。

ふーん、そうか。アメリカの学校ってすごく自由みたいに思ってたけど、全然違うみたいやなあ。ビデオや写真、話で知るアメリカの教育。地球の反対側の小

学校と姉妹校提携をしているということ。自分の目で確かめてみたい、アメリカの教育の実際にふれてみたい。私の中でその気持ちが次第に高まっていった。

3. 「先生だけアメリカに行ってええなあ。ぼくも行きたいわ。」

ついに、大決心をしてアメリカ行きを決めた。

「なんで、今年はアメリカから先生来ないん？」

「3年間来てくださって一応終わりになってね、それで今年は私が行くことになってん。」

「いいなあ。ぼくらだって行ってみたいわ。」

「わたしらも連れて行ってよ。」

そうやなあ、行ってみたいという気持ちは多くの先生たちはもちろん子供たちだって持つだろう。その人たちの思いも一緒に連れて行けたらいいなあ、と思った。

4. I'm looking forward to having a great experience.

6月の初め、E. C. U. から事前の打ち合わせにスベンス先生とレッドフォード先生が来校された。1、2年目に訪米された先生たちと共に校長室でお目にかかる機会を得た。入室したとたん、レッドフォード先生の満面の笑顔と温かい握手、私にもわかる英語で「あなたを待っています。」と“アメリカの挨拶”で肩を抱き言ってくくださった。そのあと米川先生のご自宅での教育談義にジョークもまじえての楽しいホームパーティにも参加させていただいた。この時から、私の中のアメリカはノースカロライナになり、レッドフォード先生が待っていて下さるのだという具体的なイメージに変わっていった。

5. 事前研修だけでも、このプロジェクトに参加して良かった

8.26の新大阪集合までに3回の事前研修を受けた。その1回ずつが今までに経験したことのない研修内容である。アメリカの、そして、ノースカロライナの教育内容やそれに関わる現地の文化や生活様式は、知れば知るほど興味がわいた。また、小、中、高の教師が一堂に会しての研修である。

「学校間でも成績による競争になっている。」「教師の評価も厳しい。」等は、1、2年目に参加された先生た

ちからも聞いていたことではあった。「でも、それで健全な学級運営ができるんやろうか。」「教師にも子供にもストレスたまるのでしょうか。」「成績ばかりに気をとられたら、子供たちの人間関係や集団づくりは、どうされてるんでしょうね。」日本の教育現場を想像しては、それと比較しての疑問が小中高を通じて次々とわいてくる。

「いや、良い先生というのはアメリカでも日本でも、共通してるとおもいますよ。」

と、米川先生が言われる。

「それはね、先生が特に声を張り上げるというのではないのですが、子供たちが集中して話や説明を聞きたくなる、学習しようという気持ちになる、そして学級全体に強制的でなく自然なまとまりというか一体感のような雰囲気がありますね。」

そのほかにも、例えば読書の冊数が多ければ地域の店で買い物ができる「お買い物券」がもらえる等、何かと横並びの多い現在の日本の教育からは考えられない話も聞いた。

近代教育史の話にも興味がわいた。学生時代にも確か講義を受けたと思うのに、30年近く現場で過ごしてから改めて研修してみると、子供たちを通して日本の教育史を振り返ることができること、これから行くアメリカの教育の現在までの流れを知っておくことができた。

初対面だった同行する先生方とも回を重ねるごとに親しくなり、加えて第一回目に参加された蛭田・松田両先生からの、「こちらのしたいことをはっきりと伝えることが大切。」というアドバイスも得られた。

日常とはかけ離れた研修の内容に、参加するたびアメリカへの期待がふくらみ、元気が出るのであった。

6. 準備は進んでいますか？

大阪グループでの事前研修が始まった頃から、現地で私が参加する広島グループのコーディネーターの先生から連絡が入るようにもなった。「準備？ でっかいスーツケースが要るってことかなあ。」などと考えるほど、いったい私は現地で何ができるのか、最初は予想もつかなかった。

しかし、米川先生から「何をして下さっても結構ですから。」というコメントもいただいている。Wahl-Coatesとは、3年間のつながりもある。本校の子供た

ちがアメリカの先生方をお迎えして直接ふれあうことを喜んだように、私もアメリカの子供たちとの学校生活を楽しんでこよう、直接ふれあって日本のことを伝えてこよう、そして、私が経験したことをうちの子供たちに伝えよう、それが「ぼくらも行きたい。」という子供たちの願いに少しでも近づけることになるだろうから、と考えた。

さて本校では、総合学習の一環として地域のことを学習する際、本校からすぐ近くにある信貴山を取り上げることが多い。ここにある寺は国宝の信貴山縁起絵巻でも有名でありシンボルともいえる「虎」を祀っていることでも有名である。この虎は、張り子になっていて首を振るユーモラスな置物にもなっており、子供たちにもなじみ深いものでもある。そこで、この虎を学校の代表として、また先方へのお土産として連れて行くことにした。

それから、Wahl-Coatesから交流の一環として子供たちが演じたミュージカルのビデオを送ってもらったことがある。本校では、それを全校で視聴した。それで、私も本校の子供たちの合奏や歌のビデオを持っていき紹介することにした。5、6年生の音楽の授業風景を、音楽専科の西村先生の協力を得て録画した。「このビデオに閉じこめてあなた達をアメリカに連れて行きたいねん。」と言うと、喜んで演奏してくれ最後には「Hellow」と笑顔で手を振るというおまけも付いた。

現在私の所属する1年生の子供たちに「アメリカの子供たちにあなた達の描いた絵を持っていきたいから描いてね。」と言うと「えー！ 先生アメリカへ行く道わかるのん？」「ちゃんと帰ってこれるか？」と、えらく心配してくれた。

7. 準備の中で見えてきたこと

「現地でしたいことのリストを作っていって提出すると良いですよ。」というコーディネーターの先生のアドバイスを元にやってみたいことを書き出してみた。

- ・日常の学校生活を知りたいので、ごく普通の language の時間に、生徒の一人として参加してみたいこと、あるクラスに一日ずっといてみたいこと。
- ・1年生か2年生のクラスで、日本の子供たちに人気のあるゲームをさせてほしい。ごろごろどっすん・フルーツバスケット・なぞなぞ
- ・Where is Sangou—kita E. S. のコーナーを作ら

せてほしい。世界地図・日本地図・奈良県・三郷町・学校と付近の写真・信貴山と法隆寺の掲示

・5, 6年生の音楽の授業のビデオをみてもらい、リコーダーの紹介と実演。

・スペシャルクラスの授業を見たい、また現在、障害児学級を担任しているので教具教材を見せてほしい。大学と連携しているということなのでその実際についても知りたい。

・Japanese calligraphy の体験はいかがですか？

この中で、特にさせてもらいたかったのは、本校の紹介コーナーを作ることであった。子供たちの目につくところに、日本のどこに三郷北小学校があるのか、どんなところなのかを知らせたいと思った。本校の児童も姉妹校であるといっても具体的にどこに Wahl-Coates 小学校があるのかを知っている子供は少ない。また、日本といえばまだ富士山、芸者等のイメージも強いと聞いているので是非とも写真で紹介したいと考えた。信貴山、法隆寺のすぐ近くなのだということも紹介したい。実際にお土産の虎を買いに行ったり、パンフレットをもらいに行ったりし、準備を進めた。

それと共に、どうしても自分の言葉で紹介したいという希望を持っていたので、英訳をしなければならない。パンフレットを読みながら小学生にもわかる英語にする作業の中で、「ああ、信貴山や法隆寺はこんなに古くに建てられ、こんなにもたくさんの日本の宝物が残っている所なのやなあ。」と改めて自分がどんなに由緒あるところにごく普通に暮らしていることを認識した。2週間の外国生活ということも初めての体験であるので、こちらの準備も経験者に聞きつつ、外貨との交換や、気候を調べての衣服の用意等が必要である。

「これは、私自身の総合学習やわ。」と言いつつスーツケースに荷物を詰めたり出したりしている私の姿を見て、21歳になる娘が笑いながら「47歳の旅立ちやなあ。」と言った。

8. まさに体験型総合学習としての現地研修

①それは、混乱から始まった

十分に聞いていたことではあったが、Greenville は遠かった。関空を発ってから約18時間。(私にとっては、それまで共に事前研修を受けてすっかりうち解けた大阪グループの先生たちとラレーの空港でお別れし、初対面に近い広島グループの先生たちとお会いすると

いう体験も含め)信貴山の虎をリュックにぶら下げて、はたまた自動車のフロントに乗せて、それを主人公にビデオ撮りしながらの行程であった。

長いと言えば長いが、18時間で地球の反対側に立っていると思えば短い。しかも、なぜか土曜日の午後4時過ぎに発ったのにデトロイトに着いたのが土曜日の午後3時。この時から日にちや曜日の混乱が始まった。

翌、日曜日は町探検。もちろんスペンス先生の案内は英語。周りはすべて広島弁。頭の中は大阪弁。言語の混乱も始まった。

とてつもなく広いスーパーマーケット。芝生と木々の緑で美しい町並みだがどこにも山が見えない。丘すらもない。方角もわからなくなった。

しかし、不安は全くと言っていいほどなかった。それよりも、これまでに体験したことのない予想もほとんどつかない生活が始まることへの期待の方が大きかった。

「何をしてもらっても結構ですから。充分にアメリカを楽しんで下さい。失敗したっていいんです。むしろそれを笑って楽しめるぐらいでないと。」という、米川先生の言葉を思い出すたびに気持ちが楽になる。

土地も物もけた外れに豊かな国アメリカ。たった1日でそのことを実感できる国アメリカ。Seeing is Beleving.

②まるで故郷に帰ってきたような歓迎を受けて

やがて、スペンス先生の車は広い芝生の前庭のあるレッドフォード先生の家に着。今夜はPot-luckパーティということだ。「pot (鍋) の中にluck (運) が入ってるんなら間鍋かなあ。」という神山先生の予想であったが、それは持ち寄りパーティのことだった。

家の中からたくさんの方たちが出迎えに出てこられた。十数名はおられるだろう。夕陽の中で私は満面の笑顔のレッドフォード先生にアメリカ流の挨拶で抱き寄せられた。次は2年前に来校された副校長のハーヴィ先生。次々と握手と抱擁と笑顔とで歓迎の意を表して下さる。3年間で顔見知りの方も多い。お辞儀から始まり、場がうち解けるまでにしばらく時間を要する日本の会食と違い、家の中に入るとそこには銘々で準備してきて下さったアメリカの家庭料理が所狭しと並べられ、手に手にお皿と好きな飲み物を持ち適当に好きな場所で日米入り混じっての歓談となる。Wahl-Coates

の先生たちがほとんどで2名のElm-Hurst E. S.の方がおられるということだった。

「あなたは Wahl-Coates でどんなことがしたいですか？」と聞いて下さったのでさっそく英訳してきた希望を記した用紙を手渡す。「OK」「あなたの希望を出来るだけかなえましょう。」何となく、おとぎの国に来て魔法使いと話をしているような錯覚に陥る。おぼつかない英語力でも充分に楽しいと感じられる和やかさは、私が今までに持っていたパーティの意味を覆すものであり、それは、6月に米川先生のホームパーティで経験した飲食を共にしユーモアのある会話を楽しむ、まさに Enjoy するという雰囲気だった。そして、適当な時間でさっとお開きにし、心のこもった挨拶で明日の再会を待っていますと言うことを十分に伝えてお別れするという、まことに後味のさわやかなパーティであった。

「それにしても、Wahl-Coates の歓迎ぶりはすごいもんじゃねえ。」「なんか、ずっと前からの知り合いみたいじゃなあ。」本当にそうだと私も感じていた。

「3年間の交流は大きいですね。」というスペンス先生、コーディネーターの先生の説に、「N. C. は南部ですが日本でいうと東北のような感じのように思います。人情があって、どうやって迎えてあげようかと一生懸命してくれますよ。」と事前研修で聞いた話を思い出す。でも、こんなにも温かく歓迎されるとは思っていなかった。感激であった。

③学校めぐり

19日(月)二つの小学校と、高校を見学

・Wahl-Coates では、全校集会での歓迎会があった。「yo-ko-so」という歓迎の大合唱、本物の歌手をよんでこられたのかと思うような歌唱力のある先生によるアカペラの国歌独唱に続き、いよいよ自己紹介である。信貴山で一番大きな虎の置物を出して英語で紹介するのだ。時差ぼけのせいで異様に目がさえて眠れなかった夕べの夜中、ホテルの部屋で一人練習した説明の文章。ガサゴソと箱の中から虎を出してびっくり仰天！虎の首がない。箱詰めするのに外してあったのだ。お寺の人が「外国まで持って行ってくれはるんやったらていねいに詰めとかんとなあ。」と言って下さっていたのを思い出した。おかげで壇上で慌てて胴体と首をくっつけることになってしまった。

「この虎は幸運をもたらし、邪悪な物を退ける力を

持っています。私の学校から、お土産に持ってきました。(要約)」と言って校長先生に手渡す。私の課題を一つ終えた。

その後、多分子供たちのクラブの一つであろう2本のスティックを巧みに打ち鳴らしてのダンスのようなものを披露してくれた。それで、私もお礼に持参してきたリコーダーを吹くことにした。一瞬ええやろうか？と考えたが、「意思ははっきり伝えること」「何やってもいいですよ」というアドバイスを思い出した。校長先生に尋ねると「どうぞどうぞ」と勧めて下さった。It's a small world にする。真剣に聴いてもらえたこと、大きな拍手がうれしかった。

集会の後、子供たちが整列して整然と教室に戻っていく。聴く態度と共にきちんと集団行動様式を指導されていると感じた。

しかし、その後の校内の見学は本当にオープンで、さあどうぞどこでもご自由に、という感じで先生たちやスタッフもごく自然に迎えて下さった。

・車で10分ほどの所にElm-Hurstがあった。こちらは交流して1年ということであったが、私たちは一様にあまりに学校の雰囲気が違うことに驚いた。まず、学校自体が整然としている。校長先生が先頭に立ってしずしずと案内して下さる。どの教室もきちんとしていて静かに授業が進んでいる。校舎の建て方も Wahl-Coates が学年別に庭の中に点在しているというのに比べ、日本と同じように一列に教室が並んでいるというのも理由の一つかもしれなかったが、歓迎というよりは本当に学校見学に来たという感じであった。それはそれで興味深く、学校を後にしてからも「この違いはなんなんじゃろうねえ。」ということが話題になった。

・最新式 High school も見学した。一番印象的だったのは、生徒の希望で選択できるコースが多様であるということだった。日本でもそのようになりつつあるが、選択の幅が広い。何しろ同じ学校の中で同じ時間に日本語の授業、オーケストラの授業、実際の自動車の整備、パソコンを使っている授業が行われているのである。しかも設備は垂涎物、充分な広さである。ここはもう、感心するしかなかった。

ウォーキートーキー片手に映画女優さんかと思まがうようなスタイル抜群の副校長先生の案内、本物の拳銃を腰にぶら下げている常駐の Police man。廊下の幅は約10メートル、しかも全部平屋建て。歩き疲れて足

が棒のようだ。ああ、アメリカ！

④まるで職員のように20日（火）から23（金）まで、
Wahl-Coates で過ごした。

朝、6：55にホテルにAdams 先生かBarnes 先生が
迎えに来て下さる。

1日目 5年生のクラスにて

・20日6時過ぎにホテルのダイニングに行った私は呆然とした。そうか、毎朝この食事が続くのだ。山盛りのバック入り牛乳、シリアル、甘いパン（自分で焼くトーストもあったが）、そこへ日本のサイズの倍は優にあると思われるバットにてんこ盛りになったスクランブルエッグと、これまたてんこ盛りの焼いたベーコンとソーセージがこれでもかといわんばかりに並んでいる。野菜が全くない。かろうじてカットフルーツがあるくらいだ。胃がぐったりしてくるのがわかる。ワッフルをかじって牛乳で流し込みフルーツでしのいだ。隣のテーブルで夫婦らしき人たちがもりもりと食べている。がっくり。

・そこへ、一緒に勤務する（？）石井先生が「もう、迎えに来てくれますよ。」と呼びに来てくれた。ピンクのパンツスーツの Adams 先生は元気いっぱいである。

・夏時間で7時というのにやっと陽が昇る頃、学校に着いた。もう、そろそろ子供たちの登校が始まっている。先生たちは教室で待機、子供たちを迎え、宿題の点検などを行っている。子供たちは教室にいて外へ遊びに行かない。おしゃべりしている子供もいない。自分の席で読書などを行っている。うちの学校のにぎやかさとはずいぶん違う。静かだ。

・4日間の時間割表をいただいた。校舎の地図と共に。「この予定表に従って、でも好きに行動していいです。写真も自由に撮っていいです。」Harvey副校長先生がにこやかに言って下さった。昨日、歓迎会でもらったWahl-Coatesのポロシャツを石井先生の提案で着ていったが、それを職員の方たちが皆、とても喜んで下さった。（このシャツはWahl-Coates がSchool of the yearに認定された記念の物なのでとても誇りにしておられるようだった。）廊下で行き違うと「Hi」「モーニン」などと気軽に声がかかる。

今日の予定の5年生のBarnes先生の教室に向かう途中、子供の声で「オータサン」と呼び止められた。「Your recorder is very good」3年生くらいの男の子

が真剣な顔で言ってくれている。寝不足も朝食の不満も吹っ飛んだ。子供からエネルギーをもらうのは日本でもアメリカでも同じだなあ。

・8時。校内放送で一日が始まる。子供の声で今日の予定などを言っている。続いて校長先生の話。全校集会の始まりも国への誓いからだったが普段の1日も誓いから始まるのだ。いたるところに国旗があり国の偉人の写真も掲示されている。

・8：10。算数の授業が始まる。能力別3分割。学年の最後にテストをして3つのレベルに分けるのだそう。ハイレベルのクラスでは、応用問題重視、個人のスピードにあわせて読書を効果的に取り入れていた。ミドルクラスは、作業をしながらの一斉授業だった。ローレベルクラスは説明しながら基礎の問題を一緒にし、丁寧に答え合わせもしていた。どのクラスも静かで私語など全くない。アシスタントティーチャーがどのクラスにもいて机間巡視等している。なんて人手が多いのだろう。しかし、雰囲気としては日本の進学塾のようだと感じた。

ところで、二人の黒人の子供が気になった。教科書もなくノートもなくミドルクラスの後ろの席にじっと座っている。60分の授業中、ただじっと頬杖をついて静かに座っていた。

・次はReadingだった。たいした休憩もなくすぐ分厚い教科書を開いて授業が始まる。どのクラスもそのようだった。さっきの男の子の一人がやっぱり何も持たず座っている。私も一緒に参加したかったので教科書を開いている女の子の横に行き、見せてほしいと頼むと快く見せてくれた。男の子にも声をかけ3人で教科書をのぞき込んだ。多分、その男の子は文章がずらずらどころかほとんど読めないのではないだろうか。でも、今ここだよ、と指でたどると笑顔を見せて目で追っている。

先生が読み、内容に対して1問1答式の静かな授業が進んでいく。挙手する子は決まっているようだった。私が子供の頃の授業に似ている。先生は先生、生徒は生徒、私語禁止、反抗などもってのほかのようだ。冗談もない。私の母から時々聞く戦前の様子に近いかもしれなかった。

・しかし、ブザーが鳴ると教室は一転。笑顔におしゃべり、突然の変化にびっくりする。しかも、いい匂い。えっ、ああおやつ時間？先生も食べてる。先生も子

供たちも私にも勧めてくれる。教卓の後ろにスナックの袋を並べたバスケットがあり、先生がそれを時々手渡している。「持ってきていない子供にあげるのよ。私が自分で買ってきておいてあるの。」さっきまでの静けさはどこへやら。私の周りに来て珍しそうに電子辞書を見ている子供たちが数人。使っていいというので早速試し始めた。取り合いするでもなく仲良くしている。英語の例文が出てくると歓声をあげている。「きょう、あなたは私たちとlunchを食べてくれますか？」5人の子供たちが聞きに来た。どうやら仲良しグループらしい。OKと言うと大喜びだった。腕を取り、親愛の意を表現してくれる子もいる。

・「私は、あの男の子がとっても気になる。」と先生に言ってみた。「そう、あの子は今日お母さんと引っ越していくの。お父さんが出て行ってしまって生活が苦しいので。」「どこへ？」「さあ、わからない。」「これからの人生は、あの子にとって厳しいのでは？」「きっとね。でも、そういう子供も多いのです。今日もさっき両親が離婚した、という連絡が入りました。あそこにいる、あの女の子です。表情が暗いでしょう？」

私たちは、ため息をついた。そこへブザー。先生はぱっと先生の顔に戻り、子供たちはあっという間に席に着き、めいめいが読書を始める。シーン、黙って私に手を振ったり寝ているのかと思われる子供もいたりするが、この転換の早さはどうだろう。

・さて、ランチタイム。先ほどの5人組がまるでボディガードのように私をランチルームに連れて行ってくれる。ハンバーガーかサンドウィッチ、マッシュポテトかフライドチキン、アイスクリームか缶詰のピーチ、ミルクか紅茶というように選べるらしい。カウンターの向こうから笑顔のスタッフが聞いてくれる。席に着くと、興味深げに「オオタサン、何歳？」と聞かれた。思わずむせ返りそうになる。(これって、日本の子供たちと一緒にやんか。」「何歳と思う？」「52歳！」「No！」にらみ返してやった。「28歳！」いきなりとんでもなく若くなってしまった。これも、日本の子供たちと同じ。驚いた顔の私を見て大笑いしている子供たち。からかわれてるみたいだけどこのノリは、去年私が担任していたクラスとほとんど同じだ。

次は、こちらから質問する。「大きくなったら何になりたい？」ところが、子供たちの言っていることがわからない。思わず「なんて？」と、日本語で聞き返し

てしまった。すると、リーダー格のレイナちゃんが身振り手振りで「彼女は、ペットに関係のある仕事をしたいのよ。」というように通訳してくれた。次の子からはゆっくりとはっきりと易しい単語で言ってくれる。「ヘアスタイリスト」「弁護士か医者」「トラックドライバー」「看護婦」みんな、しっかり答えてくれる。自分の意見を言うことに自信を持っていると感じた。そこで私は寒くて食べ続けることが出来なくなった。第一冷房が効いている、飲み物が冷たい、そこへもってきて楽しみの山盛りピーチがなんとフローズン！がっかり。確か、朝食もがっかりだったような・・・

・外は94°hの炎天下。先生の監視の元、休憩時間を楽しむ子供たち。ここで、日本のゲームをすることになった。芝生の上に椅子を持ち出して丸く座り、「ごろごろどっすん」の説明をする。ルールは簡単。さっそくやってみることに。ここで感心したのがBarnes先生の変身ぶりだった。授業中とはうって変わった楽しみようである。もちろん、盛り上げて共に楽しめるようにするためとすぐに分かるが、それだけではなく、本当に子供と共に過ごすことが楽しいとも分かる。

次は「フルーツバスケット」。これもすぐに出来る。「orange」とか「apple」とか誰かが言うたび歓声をあげて走り回る子供たち。そのうち、「cherry」とあちこちから不満げな声があがる。cherryとまだ言ってもらってないので催促をしているのだ。その言い方も日本の子供たちと同じ。

「私たちは、とても楽しい時を過ごせました。太田先生にお礼を言いましょう。」きりのいいところでBarnes先生の一声。子供たちから一斉に「Thank you」の声、そして、何人もの子供たちがそばにやってきてはそれぞれの言葉で気持ちを伝えてくれる。すてきな笑顔付きで。本当にさわやかなクラスだと感じた。それに、今日、何処かの町へ引っ越していくのだという男児もみんなと仲良くゲームを楽しんでいた。そのこととても嬉しかった。

・教師用の休憩室には、私たち用の飲み物とフルーツを用意して下さっていた。生のフルーツは有り難かった。また、その部屋には過去3年間で来日された思い出の写真が厚さ10センチはあると思われるアルバムにきちんと整理されて置いてあった。めくってみると、自分もいれば懐かしい同僚の顔、うちの学校の子供たちの普段の様子等、思いがけない場所での再会であっ

た。

その時、一人の男児がいきなり入ってきた。そして、まるで知り合いのように私に握手を求め自分は6年生でこの学校の卒業生であり、今日は先生たちに会いに来たのだという。いかにも賢そうな子供で、なんて流暢に大人相手に話す子供だろうと思っていると、突然抱きかかえられて私は宙に浮かんでいた。えっ、これもアメリカの挨拶？まさかそんなはずはないよね、地面におろしてもらって副校長先生の所に連れて行った。そこには、4、5年生の女児が二人、うなだれて座っていた。生徒指導中だと分かったがこちらも緊急である。副校長先生はその男児をご存知で、すぐ引き取って下さった。

しばらくして、休憩室に副校長先生が来られ、彼の話になった。「とても学力は高いのだけれど、ソシアルスキルが充分でないためコミュニケーションのとりかたが変わっている。そういう子供も増加の傾向にある。何か失礼はありませんでしたか？」私が彼の挨拶の仕方を伝え、これもアメリカの挨拶かと思ったが・・・と言うと大笑いとなった。呼び出されていた二人の女児は、トイレで口論していたのだそうだ。昨日もしていて、注意を受けたのに今日もしたので副校長先生のご指導となつたらしい。

・2:30になると、潮が引くように子供たちは帰ってしまう。保護者の車で、スクールバスで、と。三々五々友達と連れだって歩いて帰るにはあまりに遠く、また危険も多いことだろうから。

3:30から、大学で教科書を見せてもらった。教科書会社の方の説明だった。1時間もたった頃、Barnes先生が「私たちはこれから予定があるんだけど。」と、わざと不機嫌なようにおどけて言うと、レッドフォード先生がにっこり笑って「特別にあなたとMr TanakaとM's Otaはもう行っていいですよ。」Barnes先生が勢いよく立ち上がって「Let's go！」Pot luckパーティの時、「ダンスを習っているので連れて行ってあげる。」と言われていたのだが本当だったのだ。かくして、田中先生と私はBarnes先生のダンスレッスンに行くことになった。そこは、町探検の時、「わーすごい。」と、歓声が上がった煉瓦造りのお屋敷のひとつで、退職校長ご夫妻が老後の余暇にダンス教室を開いておられるということだった。

仕事中は真剣そのもの、休憩時間は子供たちと遊び、

仕事が終わるとダンスのレッスンを心から楽しむ、52歳のアメリカ女性教師Barnes先生の生活ぶりはメリハリが利いていてパワフルだ。そういえばクラスの子供たちも元気ではきはきしていたっけ。

先生の教室の入り口にあったTeacher of the yearのプレートを思い出す。すぐステップを軽やかに踏んでおられる田中先生の足を踏んづけながら、もたもたと動き回る私だった。

・その後、レストランへ。Wahl-Coatesの先生たちと夕食を共にする計画である。英語と広島弁の交錯する中、食べても食べても減らないスパゲティと格闘する私に副校長先生が、「Wahl-Coatesの一日はどうでしたか？いろんなことを体験しましたね。」興味深そうに私の返事を待っておられる先生たちの表情。「My head is spinning」爆笑。

「じゃ、また明日。6:55にね。」と、pick-upの約束をして、残ったスパゲティをお店の人に言って発泡スチロールの持ち帰りようパックに慣れた感じで詰めてもらい手を振って帰っていく。「これは、明日のランチ用。」うーん、合理的。

・それから、ホテルに戻ってミーティングが始まる。お互いのその日の体験を交換しあうというもので疲れているにもかかわらず話は尽きない。他校では説明や見学が主のようであったがWahl-Coatesでは、1日目から石井先生も私も自由に活動させてもらっているという感じだった。

長い1日が終わった。なんて色んなことがあっただろう。熟睡。

2日目からのこと 私のであった素晴らしい先生たち
・21日 朝から早速Where is Sango-kita E Sのコーナーを作る。場所はなんと一等地ともいえるメディアセンターの入り口である。こちらから持参した写真や地図はすぐにラミネート加工してもらった。

子供たちが自由に本を借りに来る。3人のスタッフが常駐しているようだ。まるで、小さな図書館である。

8:00 朝の放送が始まった。先生も子供たちも声の方に向かって直立、誓いの言葉を言う。これはもう、徹底している。

メディアセンターの奥で1年生の授業が始まった。若いステキな先生が優しい声でABCから教えている。歌、読み聞かせ、本の借り方と続く。1年生の担任と

ばかり思っていたらメディアエキスパートといって図書館とパソコンの専科の先生ということだった。この後もメディアセンターに行くたび、このフィリップス先生の授業を見たが、時には、ぬいぐるみを腕にはめての語り聞かせ、OHPを使ってのパソコン指導等、まさにメディアエキスパートというにふさわしい先生だった。また、声が常にソフトで聞き取りやすくそれも魅力的だった。また、フィリップス先生には、地図や写真の説明を英訳するときお手伝いいただいた。

名前は分からなかったが、あと二人の司書のような先生も掲示等快く手伝って下さった。かくして、三郷北小学校のコーナーが完成。Wonderful!という声に満足していると副校長先生とShreve先生が「あなたを捜していた。」と、安心したようにやって来られた。「私のクラスになかなか来ないので。」ということである。「ランチを食べたらすぐ行きます。」「Oh, no! ランチタイムは終わってしまったわ。私は夕べのスパゲティをもう食べてしまったし・・・」と、頭を抱えるShreve先生。Oh, no! と私も言いたい。結局、昼食はバナナ1本。

・3年生のShreve先生の授業はScience。ノースカロライナの木や葉っぱについてだったが、先生のTシャツがなんと様々な葉っぱのプリントで、実物をシャツの葉っぱと照らし合わせながらなので時には背中を指しながら、というとても愉快的な授業であった。そして、葉っぱの上に紙を置いて色鉛筆でこすり出す作業をした。一人の男児がうまくいなくてイライラし始めた。そばに行って、紙を押さえておいて「もう一度やってごらん。」と促すと今度はうまくいった。とてもうれしそうに「Thank you」と言い、私のノートにサインをしてくれた。

Shreve先生は、活動的で表情豊かである。教室掲示もいろいろなコーナーを工夫し、鳥やウサギも飼っておられる。活発に机間巡視をして一人一人の出来具合をこまかくチェックされていた。子供たちは良く先生の指示を聞き、楽しそうだった。

・この日、私は自分が行方不明になっただけでなくファイルをなくし、先生方に探していただいた。夜は、夕食の買い出しに行ったさきで迷子になり、グループの皆さんに大変心配をかけた。夜中、気がつくと枕が6つもある巨大なbedがあるにもかかわらず、なぜか床で寝ていた。ストレッチをしながら眠ってしまったよ

うだった。

・22日朝、私は自分自身の大きな変化に気づいた。あの、ホテルの相も変わらずの小山のように盛り上がったスクランブルエッグを見て美味しそうと思ったのである。日本では飲んだことのない朝食時のコーヒーも平気になって甘いパンを2個も食べていた。日の出前の6時過ぎのダイニングで一人朝食をとっている自分。お迎えに来て下さる先生とハグしての朝の挨拶。車の中での英会話。学校へ着くなり「オハヨーゴザイマス」「Good morning」「Hi」などあちこちから声のかかるのにも平気で 答えられるようになってきた。なんとかアメリカで生きているではないか!

・午前中はHines先生のクラスで4年生。見るからに穏やかなもの静かな先生である。初対面だが緊張感を感じさせない対応で、笑顔で3年生と4年生のクラスと先生たちに会わせて下さる。今日1日、3、4年生の棟にいるからということだが、その配慮に感激する。「朝早いですね。」と、話しかけてみる。「そうです。7:00には来ています。」「3時で仕事は終わりですよね。」「私は4:00~5:00までいます。ペーパーワークが必要ですから。私はこの仕事が好きです。」「私も大好きです。この仕事を誇りに思っています。」思わず固い握手をする。「あなたに手伝ってほしいことがあります。」と言われた。「日本から来た子供に通訳をしておいてほしいのです。」エー! 通訳? 千葉からこちらの日本企業に転勤になった父親と共に4月から来ているのだが言葉がまだ良く分からないということだった。私もわからんのに。

算数の授業が始まって、これはすごいと驚いた。子供たちの学習意欲が高く、静かだが活気に満ちている。質問もゆっくりと的確でOHPの字も丁寧にわかりやすい。子供たちの答えに必ずほめ言葉で笑顔の返事。適度な緊張感、姿勢の良さ、いつも先生の気持ちが教室全体を包んでいるのが感じられる。しばらくして、グループ活動に入った。「子供たちどうして教えあうことも大切にしています。」ということだった。日本人のNちゃんもみんなと教えあっていた。

教室の中にjournalというコーナーがありノートがきちんと整理されて置いてある。許可を得て見せてもらうと、それは日記のようなものだが先生から必ず青いインクの字で返事が書いてある。子供たちの字も丁寧

でしっかり書こうという気持ちが伝わってくる。教室の入り口にはTeacher of the yearのプレート。やっぱりなあ。「良い先生って世界中同じじゃないでしょうか。」アメリカに来て本当にそのことを感じた。

・そこへ、副校長先生。「あなたは有名人よ。TVの取材が来ているから来て下さい。」Barnes先生のクラスで習字の授業をすることに。このクラスの子供たちともすっかり仲良くなった。私が行くと大喜びで迎えてくれる。私のためにアメリカのおやつを作ってきてくれたというレイナちゃん。自分のクラスのように。と言うと、Barnes先生が、「そう、あなたのクラス。」火・木・川の漢字と読み、筆順など教え、さて、子供たちに書いてもらうことに。少し4本の筆の取り合いになったがすぐに4列に並び楽しんで書き始めた。そしてお互いにいいところを認め合っている。本当に気持ちのいいクラスである。ローカルTVが撮影しに来ていたが私は久しぶりに授業が出来て嬉しかった。

・この日、夕方はECUでレセプション。ところが、ホテルに着替えに戻ったとたんつい眠ってしまい遅れそうになって大慌て。しかも、帰りにはパスポートの入ったバッグが見あたらない。これは、笑ってすませるわけにはいかないと顔面蒼白のところ、米川先生曰く「アトランタの領事館に行ったらいいんですよ。」そこへ、Adams先生が「車の中に置き忘れてあったわ。」といったん家に帰ってから、またホテルに届けに来て下さった。いつの間にか私にはトラブルメーカーという別名が付いていたのだったがAdams先生「Every groups need a trouble maker」と、にっこり。こういう一言がぱっと言えるってすごいなあと自分の失敗も忘れて感心してしまった。

・その夜は米川先生も交えてのミーティングとなる。改めてWahl-Coatesの開放的な私たちの受け入れが話題になると共に、私の数ある失敗が明るみに。「いいですよ。それはとてもいい経験ですから。失敗談というのは後になってもいい思い出になるもので。」というフォローに、やはり安心する。

そして、この、「安心して自分のすることに打ち込める」ということは、非常に大切なことではないかと考えた。リーダーの「大丈夫です。」という一言に、なんと力を感じる事だろう。そしてのびのびすることだろう。私にとっての総合学習的アメリカ研修は、語学はもちろん体力気力総動員でも足りないくらいの体験

である。でも、こんなに楽しく生き生きと活動させてもらっている背景には、「思い切ってやりたいことをやったらいいんです。そうすれば、何かがつかめるし身のある経験になります。」という事前研修からのアドバイスに支えられていることを改めて思う。また、このことは大人が子供にも与えてやれるものではないかと感じた。

・23日は、Wahl-Coatesでの最終日である。

朝食も、もりもりと食べて、もう自分たちの職場のようにさえ感じられるWahl-Coatesへ行く。「今日で最後かと思うとなんか寂しいなあ。」という石井先生の言葉に思わずジーンとくる。

Shreve先生のクラスに行くと子供たちが笑顔で寄ってきてくれる。朝からお母さんと登校してきている女の子がいる。犬を連れて。今朝のスピーチでその愛犬のことを話すのだという。お母さんが「うちの娘が日本人の先生が来ていて、ととても嬉しそうに話をしていました。ありがとうございます。楽しく過ごしましたか？」と話しかけて下さった。女の子は愛犬の話をした後、みんなに見せて回っている。その後も、後何人かの子供たちがスピーチをしたがほかの子供たちも良く聞いていた。

このクラスでも、日本から持ってきていたおやつと一緒に食べた。(5年生、4年生のクラスでも一緒に食べた。)'もっとたくさん持ってきたかったんだけどね、スーツケースに服や本やいっぱい入れるものがあって少ししか入らなかったの。ごめんね。」と、身振り手振りでスーツケースに荷物を詰め込むまねをするとこのクラスでも大受けだった。そして、「日本のチョコレートは美味しい。」「クラッカーも美味しい。」「オオタサンありがとうございます。」と、ほんのちょっぴりなのに本当に喜んでくれた。楽しいひとときを持つことが出来た。

さて、このクラスでも「ごろごろどっすん」をさせてもらった。5年生よりもエキサイティングだった。そのうえ、Shreve先生のお母さんがボランティアで週に2回ほど自分の娘の教室の手伝いに来ておられ、お母さんも「ゴロゴロ・・・ドッスン」とオニになって参加されたのだった。

その後、「なぞなぞ・What is this?」もさせてもらった。答えの絵カードを上から白い紙でかくし、問題を言う。「I Wait my dinner on the web」少しずつ

紙をずらしていくと一斉に声があがる。「Spider！」
「そう、答えは、スパイダーです。」と、私が英語で言った。「？」子供たちの怪訝な顔。Shreve先生が気づいて「Spider」と英語で私に言って下さる。発音が悪くて子供たちに分からなかったのだ。私がもう一度「Spider」と言うと「OK」「Good！」と子供たちがほめて？くれるという場面もあった。

・この3年生の子供たちは、何日前か、算数のテストをしていたことがあるのだがそれがなんと日本の入試ほど真剣なものだったのである。棟の入り口に張り紙、『3年生テスト中立ち入り厳禁』クラスの入り口にも張り紙『テスト中』！入り口の小さな窓から中をこっそりのぞいてみると、怖いぐらいの静けさだった。今日の前にいるこの可愛い子供たちがあのテストを受けていたなんて。おやつタイムの後で、私は子供たちに言いたくてたまらなくなった。「I think、you should study hard to make your dream come true。」学校も先生も子供たちにも厳しい評価の制度があると聞くけど、それは決して評価のためにあるんじゃない。学習することはあなた達の夢をかなえるためなんだよ、と。このことは私が自分のクラスの子供たち、特にあまり学習の好きでない子供たちにいつも言うことでもあるのだが。

・Terryl先生は障害児学級の先生である。普通学級と一緒にいる子供もいるが障害児学級にいる子供たちもいる。このときは、通訳の青島さんがいて下さって助かった。いろいろな教具を見せていただき、ブロックを数十個いただいた。普通の学校の中に養護学校の棟があると言うほど施設は完備されていた。しかし、普通学級にいけそうだと思う子供もいるのだが、学級の先生があまりいい顔をしないこともある、また、家でお漏らしをしてしまった子供の母親が「学校で何を教えてくれているんだ。」と怒鳴り込んできたこともある、「だから、障害児学級の担任は特に自分の心身を健康に保ち、時には良い空気をいっぱい吸って・・・。」と深呼吸と共に「頭痛の薬も持っているよ。」とウィンクして何個かの錠剤を見せて下さった。

・午後、Snider先生の5年生の音楽の授業に参加させていただいた。私の学校の5、6年生の合奏のビデオを紹介した。イエーイと手を振る日本の子供たちに思わずにっこりとして手を振るアメリカの子供たち。そ

の様子をまたビデオに収める。

5年生の歌「Beleave」の歌詞を説明した後、「I beleave in future 信じてる。」の部分と一緒に歌おうと誘う。「すべての生き物たちの夢や希望を乗せて、この地球は回ってる・・・。」という意味をどこまで説明しきれたかは分からなかったがWahl-Coatesの5年生の子供たちと三郷北小学校の5年生の子供たちの歌声が一つになって響いた。Beleave=信じること。この日本語を覚えていてくれたらいいなあと願う。

5年生の後、障害児学級の子供たちの音楽だった。6人の子供たちと簡単な英語の繰り返しの歌やダンス。いつの間にか一緒にダンスしていた。「ぼく、あなたにリコーダー習いたい。」と一人の男の子が私に言う。「ごめんね。もうこれが最後の授業なの。」ああ、もう後何日かあったら・・・。その子は「You are my sunshine」をジェスチャー付きで熱唱してくれた。

・「あなたのしたいこと、もう残っていませんか？」副校長先生が笑顔で聞いて下さった。「もう少しいてくれたらいいのに。」「私もそうしたいですが・・・。」

こうして、私のWahl-Coatesでの4日間が終わった。好きなことを好きなだけさせて下さった校長先生、副校長先生、すべての先生方、スタッフの皆さんにお礼を言いたかったが時間がなく、手紙を書いて気持ちを伝えることにした。

・Adams先生は、私のホストファミリーである。何度も「私の家は小さなコンドミニアムです。Mirror先生の家でクラスの子供たちを招いてホームパーティを開いておられます。とても大きな家です。あなたが行きたければそこへ連れて行ってあげますが？」と、尋ねられた。「私の家も小さな家です。Adams先生さえ良ければ私はあなたの家でゆっくりさせてほしい。」と答えると「あなたはとてもよく働いたわ。私の娘とその友達と4人でステキなレストランに行きましょう。そして、ゆっくりくつろぐというのはどう？ Sniderさんも今夜私の家にくるかもしれない。」4人で食事？ちょっと待って、後の人はみんな日本語しゃべられへんやん。どうしよう。とちらっと心配がよぎったが、ええいなんとかやるやろうとAdams先生の計画に合わせることにした。

Adams先生のお嬢さんとその友人の娘さんもとて
友好的な人で、4人とも音楽が趣味であること、トム
ハンクスのファンであること。等、話には困らなかった。

また、Adams先生の家は日本のアパートとは広さが
全然違う快適な空間であった。クリスマスにはリビング
で30人ほど招待してパーティを開くそうである。「床
に座ってならできるのよ。」ということであった。

Wahl-Coates での感想の話になったとき尋ねてみ
た。「Mirror先生は今夜ホームパーティを開いて子供
全員を招待しておられると言うことだが、来られない
子供もいるのでは？それに、夜だからどうやって集ま
るのか？ほかの先生たちはそのことについてはどう思
うのか？」「Mirror先生は、今夜に限らずだいたい月
1回程度ホームパーティを開いて子供たちとその保護
者たち、だから、そうねえ約100人くらいかしら、保護
者もいろいろ食べ物を持ち寄ってきます。来られない
子供はMirror先生の夫や子供さんが迎えに行ったり、
近所の人に乗せてきてあげる場合もあります。それが
彼女のやり方なのです。誰も批判したりしません。彼
女はとても親切な人なのです。彼女の家族もそうです。
私は自分のお金でスナックを買って学校へ持っていっ
たりティーチャーズエイドで教具を買ったりしていま
す。人それぞれのやり方で子供に接すればよいのです。」
という明快な答えであった。

「Wahl-Coates は、とても開放的で学校中のどこで
も行かせてもらえたり、学級の中も自由に見せてもら
えて幸せだった。」と言うと「日本に行ったことのある
人たちが中心になって歓迎した。それは、私たちが日
本に行ったときに歓迎してもらえたからです。でも、
中には自分のクラスには入ってほしくないと言う人も
います。」そうだったのか。

「学力にかなり差が出てくるように思いました。1年
生では目立たなかったけれど、4年生、5年生では学
習嫌いな子供も出てきているのでは？」「そうです。
高校生ではかなりの人数が中退して店員になって働く
子供も多いです。」ということだった。

そこへ、Snider先生登場。親しい友人でお互いに行
き来することも多いのだそうだ。ワイン片手に話題は
Adams先生が日本に来られたときのことに。Snider先
生は、次の機会があれば日本に来たいということだっ
た。

Adams先生に限らず、「日本は魅力的な国、変化に

富んで美しく、伝統があり古くからのものも多い。食
べ物も美味しく、電車に乗るのも楽しかった。人々は
親切で友好的だった。もう一度行ってみたい。」という
ことは多くの訪日経験のある先生たちから聞いたこと
だ。Greenvilleの名所はECU。ノースカロライナの名
所はライト兄弟が初めて飛行機で飛んだところ。歴史
の浅いUSAという国から見れば日本は珍しいことや
物の多い国だろう。外国に行くと、日本のことが改め
て良く分かるというのは本当だった。

一宿一飯の恩義、という言葉があるがホームステイ
というのはまさにそのような感じでAdams先生には、
また特別な感謝の思いがある。

・Ledford先生には、ECUの教育学部に連れて行っ
ていただいた。(21日のことになるが) 障害児教育の専
門の先生に会わせてもらえるということだったのだが、
その先生が講義中ということであり、大学見学となっ
た。Ledford先生のボスという先生に紹介していただ
き、この方が一番偉い人なのかとかしこまって挨拶し
たら、その次に「彼女がここのTopです。」という年配
の穏やかそうな女性の教授にもお会いし、ボスとトッ
プとではどちらが偉いんやろう。と考えているところ
に「コンニチハー、コイズミサンニアイタイデスカー？」
という日本語が聞こえてきた。なんでこんなところに
日本の首相がいるの！と思ったらポスターが貼ってあ
るのだった。日本語の主はコンピューターエキスパー
トの中国人の孫さんだった。

Ledford先生の勧めでそこから、三郷北小学校にメー
ルを送ってはどうか、ということで孫さんに教えてい
ただくことになった。全部英語の中で聞く日本語は中
国なまりであるとはいえ懐かしく、「ワタシタチハ、ト
ナリドウシノクニデスカラ、ワタシタチモナカイデ
スネー。」と嬉しそうに言う孫さんに同感で、これもG
Pシップの日中友好の一環かも、などと考えた。

結局、目的の先生には会えなかったがLedford先生
とお話しできる時間を得た。やはり、感想を聞かれた。
私たちのグループの中で出ていた疑問の中に、同じ小
学校でもずいぶん雰囲気が違うのはなぜだろう、とい
うことがあったので尋ねてみることにしたが、一瞬迷っ
た。「どちらの小学校も素晴らしかったが・・・。」と
切り出すと「どうぞあなたは、感じたままを何でも言っ
ていいです。But not (no?) judgement」というこ

とである。よくよく今回の研修は何をしても言っても良いらしい。「Wahl-Coates は開放的で何をしてもどこへ行っても自由にして良いと言われた。

一方、elm-hurst は整然としていて交流についても説明的であった。」と、言うこと逆に「なぜ、そうであると思うか？」尋ねられた。「地域性や、先生たちの個性や、方針というのもちがうのでしょうか？」「最初はどこでも良いところだけを見せようとしています。でも、そのうち良いところも問題点も、交流できるようになります。Wahl-Coatesとの交流は3年目になります。その積み重ねは大きい。それと、」といつもの笑顔をましますにっこりされて「学校は校長先生によります。」と、きっぱり言われた。「今の校長もちろん良い先生だが、Wahl-Coatesの前の校長は偉大な人でした。彼女が学校を大きく変えました。」

それから、今は大学内で研究中だというCorbin先生にもお会いすることが出来た。アメリカでは優秀な先生は、大学へ戻ってまた研究することが出来るのだという。「今も元気で子供たちと？」とのCorbin先生の問いに「いろいろ難しいことや悩みもありますが、私はこの仕事を誇りに思うし子供が好きです。」と言うと、Ledford先生、Corbin先生の温かい手に包まれた。思いは同じ、地球の反対側でも。小さな日本と言えるくらい美しく日本の物をディスプレイされた Ledford 先生の研究室に藍染めの浴衣も飾ってあった。「飾っておかないで着て下さい。お風呂上がりに、夏に着るものですから。」と言うと「No, no, 私が着るとballoon！」スタッフ全員大笑いの中、E C Uを後にした。

⑤ I am a trouble maker!

研修も大詰め。Wahl-Coates からも Elm-Hurst からもたくさんの先生たちがラレーの会場に参加して下さったの感激のサマリー後、翌日はラレー市内の見学。いっぺんに気の抜けた状態の私は、朝から集合時刻に起床！なんと Spence 先生のお迎えで Exploris 中学校へスキップ。「何時まで寝とるんじゃ？」「全然目覚ましの音に気づかんかったけん。」このまま広島弁がぬけなかったらどうしよう？

「博物館の見学が終わったら、何時に集合するんかねえ？」と尋ねると車の中は爆笑。「なんで？どうかした？」「太田先生、1時集合って言うのこれで4回目

ですよ。」と、いささかあきれた表情の朝倉先生。「え？ほんと？」そこへ、柳原先生曰く「どこのクラスにもこういう子供がおるじゃろうが。おまえ、何聞いとったんじゃ！ていうようなんが。」「おるおる。」思わず私も（うん、いるいる。）と納得し、「私って日本から離れるとこんなに人格が変わってしまうのかなあ。」と、我ながら不思議に思うが、後から考えると E C U グループの皆さんに支えられて、私は自分のことだけで精一杯でそれで許してもらっていたのだと。Greenvilleに着いた翌朝のトイレのキー閉じこめ事件に始まり、アメリカのサイズ表示が分からずとんでもない買い物をしてしまったこともディナーのサカナになったっけ。その時はアメリカ人も日本人もおもしろいと思う話は同じで笑いすぎると涙が出ちゃうのも一緒やなあと変なところで共通点を見つけて感心した私だった。「もうこれで私の失敗も終わりじゃけん。」と言っていたが、かえりの飛行機の中でまたしても、この研修のために買ったビデオカメラのケースを無くしたと思って探していると、もう関空というときに「奈良県からお越しの・・・」と機内放送で呼び出されてしまった。「ほら、最後の最後までやっとなるよ。」

9. 三郷北の子供たちへ（帰国後の報告）

Wahl-Coatesの紹介も私で3回目となる。恒例の三北タイムという全校集会でビデオを見せながらクイズ形式で行うことにした。そして、信貴山の虎が Wahl-Coates に飾られているところ、Wahl-Coates の子供たちが Believe の歌を歌っているところ、手を振っているところも見せた。

1, 2 回目の先生と協力して本校にも Wahl-Coates はどこにあるの？のコーナーを作りお土産にいただいた燈台や人形、州ごとの25セントコイン等を掲示した。

また、5年生の総合学習・国際理解にゲストティーチャーとして招んでもらった。

10. 研修を振り返って・人生は総合学習

体験型総合学習のあり方について研究が深められているこのごろである。本校の研究主題は『かかわろう・つながろう——確かな基礎基本の上に個性の花を咲かせよう』

今回のプロジェクトに参加するにあたり研究者としてではなく、あくまでも現場の一教師として現地の先

生たちや子供たちと関わりを持ち、交流を深めたいと考えた。そのうち、自分自身がまるで総合学習をしている生徒のように感じられたことは、準備の段階で既に述べたことでもある。

そして、帰国から2ヶ月を経た今でもまるで映画を観るように思い出すアメリカでの日々。レポートにすると結構英語でやりとりをしているようだが、乏しいボキャブラリーを駆使し、身振り手振りでまるで体操をしている様子を思い浮かべていただけると良いという毎日であった。おまけに最初から最後まで失敗の連続である。お世辞にもカッコイイとは言えない私であったが周囲の皆さんに支えられて楽しく研修できたことは本当に幸せなことであったと思う。

日米の教育についての比較や、研究については1, 2回目に参加された先生方のレポートにも詳しくあるので、また、現地での私の行状は論文にはとてもならず、「素」のまま書かせていただくことにした。これも、米川先生の「どんな内容でも結構です。」という有り難いお言葉によるものである。

さて、サマリーでも述べたことだが、今回の研修で私が一番感じたことは、やはり「良い先生はどこの国でも同じじゃないでしょうか。」ということだった。個性の違いはあるにせよ共通することは、その眼差しのあたたかさと、指示の過不足のない明確さ、笑顔と共

にやり遂げさせる厳しさを持ち合わせている”ということだろうか。それはまた、忍耐強さや根気よくという目に見えない情熱に支えられてもいるし、何よりも今日の前にいる生徒が好きでなければ続かない。そのことを、Wahl-Coatesの先生方から、普段のありのままの授業を通して改めて気づかせていただいた。

そのことを朝倉先生に英訳していただき、サマリーでスピーチできたことを紹介して私のまとめといたします。

Why all children have to learn ?

They learn how to relate to others.

Learning helps them come into their own, and their dreams come true.

Adults are responsible to educate children.

There are many differences of culture and language between USA and Japan.

But we are very happy that we had wonderful, and precious experiences.

Because of our experiences children will be able to learn global citizenship.

We hope that our great partnership will continue in the future.

Thank you for our best friends !



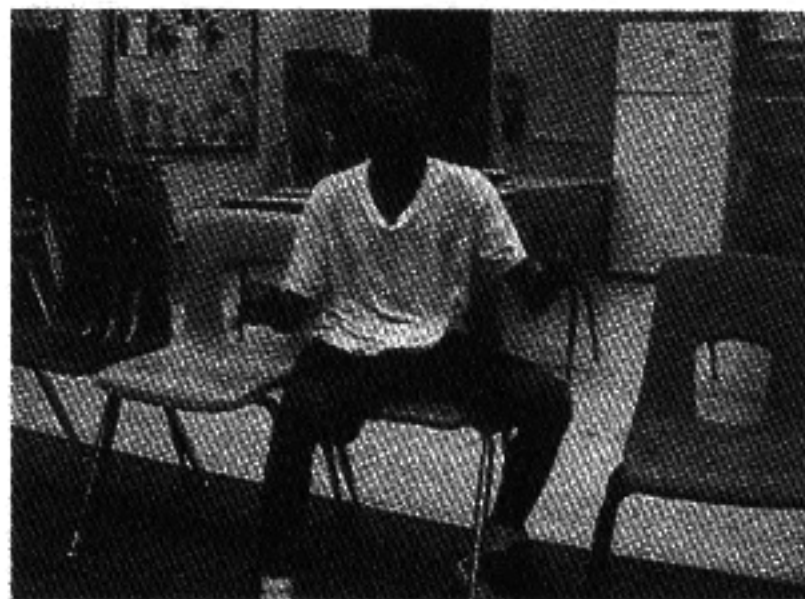
5年生の子どもたちと「フルーツバスケット」



「ゴロゴロどっすん」をする3年生



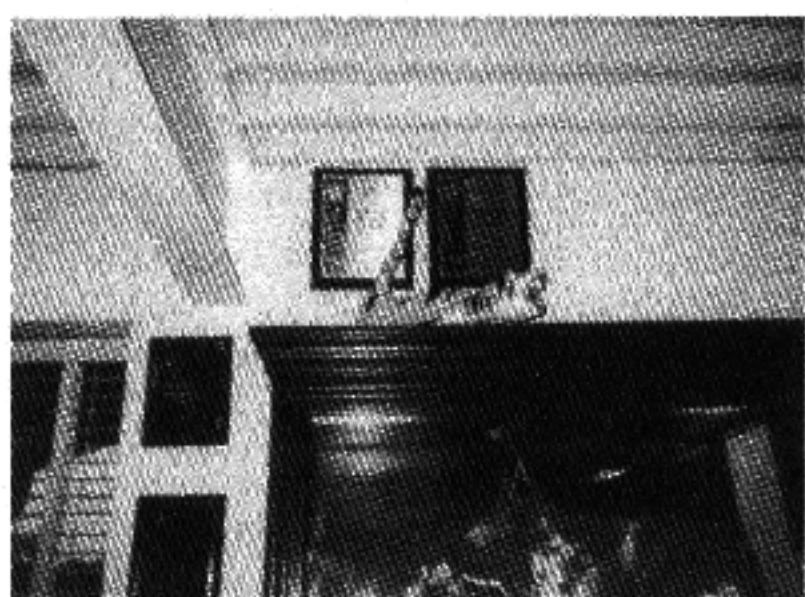
「Where is sango-kita E. S. ?」



熱唱「You are my sun shine」



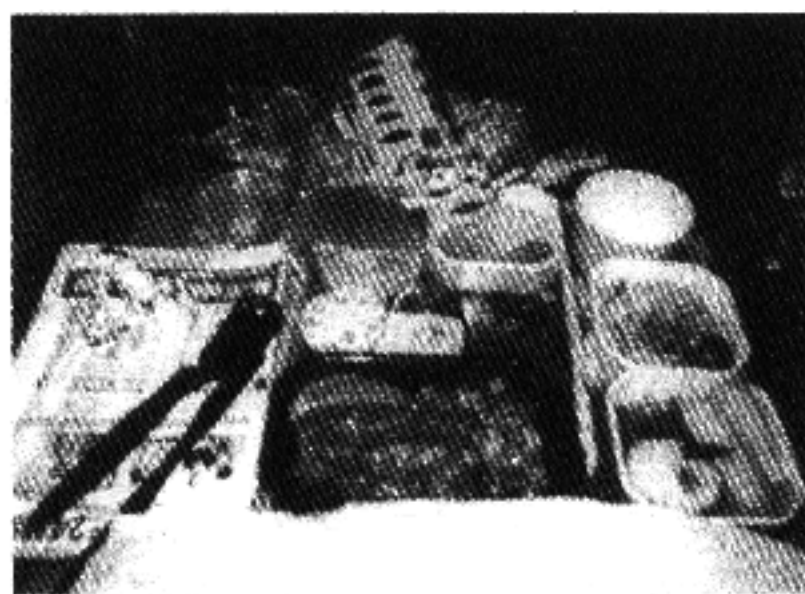
葉っぱのプリントTシャツで授業



Wahl-Coatesに着いた虎



日本のおやつ 食べてみる?



信貴山の虎 機内食を食べる

2004年2月16日 印刷

2004年2月16日 発行

未来への架け橋 2002

—グローバル・パートナーシップ・スクール—

Bridging to the Future 2002

—Global Partnership Schools—

編集兼 大阪教育大学

発行者 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
電話 (0729) 78-3299, 3300, 3831

印刷所 カツヤマ印刷

〒543-0044 大阪市天王寺区国分町5-1
電話 (06) 6771-1000